県内ワイド

井ン県実情

元気よ、届け

日赤県支部・被災地便り

日赤県支部総務課長 山本裕行さん

持っているものは仲間

雄勝での活動

われわれ日赤県支部救護班が活動した宮城県石巻市雄勝町。現地でともに被災者の救護活動に当たった地元の雄勝病院の看護師から、帰還したわれわれのもとにお礼の手紙が届いた。

地域医療の拠点だった市立雄勝病院は、鉄骨三階建てで高さ十五㍍。地震発生当時は四十人の入院患者がいたが、全員が津波にのまれ、うち三十四人が死亡、残る六人も行方不明のままだ。医師や職員は、当時二十五人が勤務していたが、うち院長、副院長をはじめ十三人が死亡し、九人が行方不明。生存が確認されているのは三人だけと、文字通り「壊滅的」な被害を受けた。

助かったうち、二人は漂流船で一夜を過ごして救助され、もう一人は山林の樹木に引っかかっているところを救助を待たずに凍死したそうだ。

入院患者の大半は寝たきりの高齢者。地震直後に、看護師らが必死で屋上へと避難させた。しかし高さ十九㍍にも達した津波は、患者も職員もまとめて、その屋上からさらっていった。

われわれが雄勝地区に入った時、病院の敷地には打ち上げられた漁船や家屋のがれきが散乱し、押しつぶされた乗用車が横たわっていた。窓ガラスはほとんどが割れ、天井から垂れ下がった電線や倒れた棚、泥まみれのエックス線機器なども見えた。玄関に飾られた花束や関係者の写真が、悲しかった。

こんな惨状の中、しかし助かった三人の一人である看護師は、すぐにわれわれと一緒になって救護活動を始めた。自ら死に直面し、患者さんや同僚が目の前で流されたショックを抱えたままだが、非番だった他の看護師らと力を合わせ、気丈に、懸命に活動を続ける姿。礼状を届けてくれたのは、その看護師さんの仲間で、地震発生時には非番だったが、自身も被災した看護師さんだった。

「皆さんのおかげで、久しぶりに楽しく仕事ができ、当院スタッフの笑顔もとても良く感じられました」

「福井県さんの救護班の顔を見たとき、懐かしさとうれしさがありました。また来て頂けるとは本当にありがたい気持ちでいっぱいです」。そして「雄勝の町が復興したら、ぜひまたいらしてください。海の幸でおもてなしさせて頂きたいと思います。これからも頑張ります。本当にありがとうございました」と結ばれていた。

津波で壊滅的な被害を受けた市立雄勝病院＝宮城県石巻市雄勝町で

われわれ日赤県支部救護班は、被災地支援に赴いてこれまでに予想もしなかったさまざまな出来事に遭遇した。帰還途中のサービスエリアで急病の幼児を処置するなど、ほんの数分違えば擦れ違ってしまっただろう偶然も、たくさんあった。

突発事態にその都度、精いっぱい対応できたのは、われわれ県救護班の誰もが「被災地のため、被災者のために最善を尽くそう」という、同じ気持ちで対応してきたからだと自負している。礼状は、そのご褒美にいただいたものだ。

プロ野球で活躍する斎藤佑樹投手が、大学時代に優勝したときの言葉が、今の気持ちに当てはまる。「斎藤はいつも何か持っていると言われて来ました。それが今わかりました。それは『仲間です！』」